

日本高等学校教職員組合
中央執行委員長 吉川 正智

皆さま、こんにちは。

日本高等学校教職員組合第119回の定期大会にご出席いただきありがとうございます。日高教で中央執行委員長を務めております、栃木高教組出身の吉川正智と申します。定期大会の開催にあたり、日高教を代表してご挨拶申し上げます。

昨年度の定期大会は、新型コロナの影響により緊急事態宣言が出され学校においても一斉休業となるなか、これまで例のない書面開催という形で実施させていただきました。今年度におきましては、新型コロナが未だ収束せず東京等は3度目の緊急事態宣言下であるため、Web開催とさせていただきましたが、このようにパソコンのモニター越しになりますが皆様と同じ時間を共有しながら定期大会を開催できることを大変うれしく思います。

東日本大震災から10年が経過し、その間にも特定非常災害に指定されたものだけでも16年熊本地震、18年西日本豪雨、19年台風19号、昨年7月豪雨があり、全国ではその他にも多くの災害が発生しています。私たちはこれらの災害と、災害を経験して得た教訓を決して風化させてはなりません。また、そのなかでの再生・復興を信じ努力することや人々が支えあうことの大切さを、コロナ禍の今こそ再認識するべきではないでしょうか。日高教は、今後も、被災地を支援する活動を模索しながら、被災地の早期の復興・再生、そして被災者の方が一日も早く安心して生活することができるよう、引き続き取り組んでまいります。新型コロナにおきましても、生活に影響を受けている方々に心よりお見舞い申し上げますとともに、罹患された方の一日も早い快復と、早期の収束、これまで通りの日常生活と経済の回復を心より願っております。

さて、この定期大会は、今年度の日高教運動方針を決定する最高意志決定機関です。議員の皆様からは事前に、GIGAスクール構想をはじめとしたICT関連のものや私たち教職員の待遇・勤務条件について、日高教の組織についてなど、多くのご質問をいただいております。ありがとうございます。建設的な議論とともに、忌憚のないご意見をいただきたいと思っております。

これらの具体的な項目や課題については、この後の一般経過報告、議案説明のなかで触れさせていただき、議論させていただきたいと思っております。私からは、個人的な想いというところで挨拶をさせていただきます。

みなさん「教師のバトン」についてはご存じかと思います。文科省が、教職をめざす学生や社会人の方に、現職の教師が前向きに取り組んでいる姿を知ってもらうことを目的に、学校現場でのエピソードについてツイッター等の SNS で発信してもらおうと 3 月末にスタートした企画ですが、教師の魅力発信ではなく、現場の悲鳴が寄せられる結果となっています。私も、通勤途中の新幹線の中で見ていますが、投稿内容としては「朝 7 時から夜 9 時までの休憩なしの勤務、残業代も出ない」といったブラック企業であることの訴え、こういった「心も体も疲弊している現状」的なものがほとんどで、次に文科省や教育委員会、校長等の管理職への不満が続きます。さすがに、生徒に対して悪く言う人はいないので、そこは救いだと思うのですが、教師の魅力を語る人はほとんどいません。しかし、中には「楽しく教師をしている人も多くいますよ。ただ、ここに発信しないだけです。」と載せてくれる人もいます。そういった内容には、「いいね」押すようにしているのですが、本当に少ないです。今年の教員採用試験の倍率が下がったら、教師のバトンの影響が少なからずあったからだと言われることでしょう。

では、わたしたち教職員組合はこの様子をどう捉えればよいのでしょうか。うちの組合員ではないだろうから、とか、精神的にまいっている一部の意見だろうと、他人事にははいけないと私は思っています。同じ教員の仲間が困っている、なんとかしなければいけない、ましてや自分は日本高等学校教職員組合の委員長ではないかと意識して、偉そうですが、この件も含め教員の勤務待遇改善に向け執行業務に取り組んでいく所存です。もう一つ、では自分が「教師のバトン」で教師の魅力を伝えるとすれば何か、ちょっと皆さんも考えてみてください。私の回答は、教員採用試験で聞かれる志望動機の回答みたいになりますが、一つは教えることが好きだから、もう一つは自分が学生時代に面白いと思える授業があり、その学ぶ楽しさ新しいことを知ったときの感動を今の生徒にも伝えたいから、そして、これは教師を経験した人なら誰でも感じたことだと思いますが、生徒の成長を感じたとき嬉しいからです。今は、休職専従なので生徒とのコミュニケーションはありませんが、組合を通して、今このように多くの人と関わりも持てていることは、これはこれで楽しいですし財産だと感じています。

もう一つ、最近感銘を受けたこととお話しします。それは 5 月 17 日に大阪市の小学校の校長先生が松井大阪市長に送った提言についてです。背景には、新型コロナの感染拡大により大阪に緊急事態宣言が出され、大阪市独自のオンライン授業という学習方針を示しましたが、オンライン授業が多くの学校でほとんど機能しておらず、保護者だけでなく教職員からも不満の声が上がり、結果、通常の対面授業に戻されました。そんな場当たりの政策もあり、学校現場を代表して小学校の校長が提言を出しました。省略しながら一部を紹介いたします。

大阪市長 松井一郎 様

大阪市教育行政への提言

豊かな学校文化を取り戻し、学び合う学校にするために

子どもたちが豊かな未来を幸せに生きていくために、公教育はどうあるべきか真剣に考える時が来ている。

学校は、グローバル経済を支える人材という「商品」を作り出す工場と化している。そこでは、子どもたちは、テストの点によって選別される「競争」に晒される。そして、教職員は、子どもの成長にかかわる教育の本質に根ざした働きができず、喜びのない何のためかわからないような仕事に追われ、疲弊していく。さらには、やりがいや使命感を奪われ、働くことへの意欲さえ失いつつある。

今、価値の転換を図らなければ、教育の世界に未来はないのではないかとの思いが胸をよぎる。

子どもたちを生き辛くさせているものは、何であるのか。私たち大人は、そのことに真剣に向き合わなければならない。グローバル化により激変する予測困難な社会を生き抜く力をつけなければならないと言うが、そんな社会自体が間違っているのではないのか。過度な競争を強いて、競争に打ち勝った者だけが「がんばった人間」として評価される、そんな理不尽な社会であっていいのか。誰もが幸せに生きる権利を持っており、社会は自由で公正・公平でなければならないはずだ。

「生き抜く」世の中ではなく、「生き合う」世の中であってはならない。

間違いなく、教職員、学校は疲弊しているし、教育の質は低下している。誰もそんなことを望んではいないはずだ。誰もが一生懸命働き、人の役に立って、幸せな人生を送りたいと願っている。その当たり前の願いを育み、自己実現できるよう支援していくのが学校でなければならない。

「競争」ではなく「協働」の社会でなければ、持続可能な社会にはならない。

根本的な教育の在り方、いや政治や社会の在り方を見直し、子どもたちの未来に明るい光を見出したいと切に願うものである。これは、子どもの問題ではなく、まさしく大人の問題であり、政治的権力を持つ立場にある人にはその大きな責任が課せられているのではないだろうか。

と締めくくられています。

現状は、理想だけでは済まなく、いろいろあるんだよ、と思われる方もいるかと思いますが、理想を不可能なことと決めつけるのではなく、目標として取り組んでいく必要があると考えます。

挨拶の最初にも申し上げましたが、本日の定期大会は、今年度の日高教の運動方針を決定する最高の意志決定機関です。代議員の皆様には建設的な議論とともに、忌憚のないご意見をいただきたいと思えます。そのことが、組合活動の活性化、発展につながり、取り組みの成果とともに、明るい未来の創造につながると確信しております。本日はどうぞよろしくお願いいたします。